

III-7 土の弾性特性の行列表示について

早稲田大学 理工学部 正員 宮原 玄

本文は杭周辺の土が弾性的挙動を示すと仮定し、その土をマトリックスによって表現して、群杭の静的解析をより合理的なものにしようと試みたものである。

杭の静的解析にマトリックス法を応用するためには、杭を適当な要素に分割し、杭自体の剛性マトリックス $[K_p]$ を作ると同時に、杭要素周辺の土の剛性マトリックス $[K_s]$ を作らねばならない。

すなわち杭要素 ij の剛性方程式は、節点変位を $\{g_{ij}\}$; 節点力を $\{Q_{ij}\}$ で表わせば、式(1)となる。

$$[K_{p,ij} + K_{s,ij}] \{g_{ij}\} = [K_{ij}] \{g_{ij}\} = \{Q_{ij}\} \quad (1)$$

杭要素 ij の剛性マトリックス $[K_{p,ij}]$ は、杭要素の弾性定数マトリックスを $[E_p]$; ひずみを $\{\epsilon_p\}$; 体積を v_p で表わし、杭要素内外のひずみエネルギーが等しいという条件を用いて式(2)を導き、更にひずみ $\{\epsilon_p\}$ が変位 $\{g_{ij}\}$ で定義できることを考慮すれば、求めることができます。

$$\frac{1}{2} \{g_{ij}\}^* [K_{p,ij}] \{g_{ij}\} = \frac{1}{2} \int_{v_p} \{\epsilon_p\}^* [E_p] \{\epsilon_p\} dv \quad (2)$$

杭要素 ij 周辺の土の剛性マトリックスを $[K_{s,ij}]$ とし、杭要素 ij が土に与えたひずみエネルギーと土の内部に貯えられたひずみエネルギーに等しいという条件を用い、土の弾性係数を E_s ; 土のひずみを ϵ_s ; 土の積分範囲を v_s で表わせば、式(3)を得る。

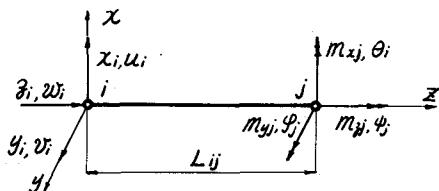
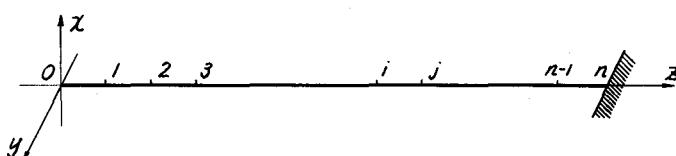
$$\frac{1}{2} \{g_{ij}\}^* [K_{s,ij}] \{g_{ij}\} = \frac{1}{2} \int_{v_s} E_s \epsilon_s^2 dV \quad (3)$$

しかるに式(3)のひずみ ϵ_s は変位 $\{g_{ij}\}$ で定義できること、体積積分の範囲 v_s を明確に定められないことなどから、式(3)から直ちに土の剛性マトリックスを導くことができない。そこで「杭と土とは常に密着している」という仮定を設け、土の変位を杭の表面の変位 $\{u_{p,ij}\}$ で代表させ、土の弾性特性を杭と土の接触面で代表させる。また杭要素 ij の土との接触面積を A で表わせば、式(3)は(4)のように書き改めることができる。式(4)の変位 $\{u_{p,ij}\}$ は変位 $\{g_{ij}\}$ で定義できるので、両辺から $\{g_{ij}\}$

$$\frac{1}{2} \{g_{ij}\}^* [K_{s,ij}] \{g_{ij}\} = \frac{1}{2} \int_A \{u_p\}^* [E_s] \{u_p\} dA \quad (4)$$

を消去して土の剛性マトリックス $[K_{s,ij}]$ を求めることができます。

剛性マトリックス $[K_{p,ij}]$ と $[K_{s,ij}]$ を説明するために、杭要素 ij の局所座標系として、図-1のよう



x 軸をとり、長さ L_{ij} の杭要素を z 軸に沿っておく。

図-1において、節点力とそれに応する変位は節点 i に、節点モーメントとそれに応する回転変位は節点 j に示した。またこれらの符号は図中の矢印の向きが正である。

図-1 杭要素 ij の局所座標系

図-1の座標系によつて抗要素 ij の変位マトリックスを式(5)のように仮定する。

$$\{u\} = [A]\{\alpha\}$$

$$\begin{bmatrix} u \\ v \\ w \\ \psi \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & z & z^2 & z^3 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & z & z^2 & z^3 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & z & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & z \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \alpha_3 \\ \alpha_4 \\ \alpha_5 \\ \alpha_6 \\ \alpha_7 \\ \alpha_8 \\ \alpha_9 \\ \alpha_{10} \\ \alpha_{11} \\ \alpha_{12} \end{bmatrix} \quad (5)$$

抗要素の節点 i, j における節点変位 $\{g_{ij}\}$ を式(6)と仮定し、式(5)に代入すれば、式(7)を得る。

$$\text{節点 } i : x=0, y=0, z=0 \text{ において } u=u_i, v=v_i, w=w_i, \frac{dv}{dz}=-\theta_i, \frac{du}{dz}=y_i, \psi=\psi_i \quad (6)$$

$$\text{節点 } j : x=0, y=0, z=L_{ij} \text{ において } u=u_j, v=v_j, w=w_j, \frac{dv}{dz}=-\theta_j, \frac{du}{dz}=y_j, \psi=\psi_j$$

$$\{g_{ij}\} = [B]\{\alpha\}$$

$$\begin{bmatrix} u_i \\ v_i \\ w_i \\ \theta_i \\ y_i \\ \psi_i \\ u_j \\ v_j \\ w_j \\ \theta_j \\ y_j \\ \psi_j \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & -1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & L_{ij} & L_{ij}^2 & L_{ij}^3 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & L_{ij} & L_{ij}^2 & L_{ij}^3 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & L_{ij} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & -1 & -2L_{ij} & -3L_{ij}^2 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2L_{ij} & 3L_{ij}^2 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & L_{ij} \\ \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \alpha_3 \\ \alpha_4 \\ \alpha_5 \\ \alpha_6 \\ \alpha_7 \\ \alpha_8 \\ \alpha_9 \\ \alpha_{10} \\ \alpha_{11} \\ \alpha_{12} \end{bmatrix} \quad (7)$$

式(2)によつて抗要素 ij の剛性マトリックス $[K_{pj}]$ を求めるためには、ひずみベクトル $\{E_p\}$ が必要であるが、抗要素の変位マトリックス、式(6)，は抗断面の性質を積分して2だけの関数に仮定したから、ひずみベクトルとして式(8)を用いる。

$$\{E_p\} = [W]\{\alpha\}$$

$$\begin{bmatrix} \frac{dv}{dz} \\ \frac{du}{dz} \\ \frac{d\psi}{dz} \\ \frac{dw}{dz} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 2 & b_z & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & b_z & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha_1 \\ \alpha_2 \\ \alpha_3 \\ \alpha_4 \\ \alpha_5 \\ \alpha_6 \\ \alpha_7 \\ \alpha_8 \\ \alpha_9 \\ \alpha_{10} \\ \alpha_{11} \\ \alpha_{12} \end{bmatrix} \quad (8)$$

また同様な理由から、式(2)の $[E_p]$ の代りに $[\bar{E}_p]$ として式(9)を、また式(4)の $[\bar{E}_s]$ として式(10)

$$[\bar{E}_p] = \begin{bmatrix} E_{ij} I_{xij} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & E_{ij} I_{yij} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & G_{ij} J_{ij} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & E_{ij} S_{ij} \end{bmatrix} \quad (9) \quad [\bar{E}_s] = \begin{bmatrix} \xi_{xij} D_{yij} K_{xij} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \xi_{yij} D_{xij} K_{yij} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \xi_{zij} L_{ij} C_{ij} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \xi_{zij} L_{ij} C_{ij} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} E_{sxij} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & E_{syij} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & E_{szij} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & E_{szij} \end{bmatrix} \quad (10)$$

を用いる。ここに E はヤング率, G はせん断弾性係数, I は杭要素の断面二次モーメント, J は極二次モーメント, S は断面積であり, R_s は地盤反力係数, α_x は x 軸方向の土質係数, α_y は y 軸回転方向の土質係数, D は杭要素の幅, l は杭要素の周囲の長さ, η は杭要素の断面形状によつて異なる係数である。

式(7)と(8)から $\{\alpha\}$ を消去して、式(2)に代入すれば、杭要素 ij の剛性マトリックス $[K_{pij}]$ は式(11)のように求められる。

$$[K_{pij}] = [[B]]^* \int_{ij} [W]^* [\bar{E}_p] [W] dz [B]$$

$$= \begin{bmatrix} \frac{12EI_{yij}}{L_{ij}^3} & & & & & \\ 0 & \frac{12EI_{xij}}{L_{ij}^3} & & & & \\ 0 & 0 & \frac{ES_{yij}}{L_{ij}} & & & \\ 0 & -\frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & \frac{4EI_{yij}}{L_{ij}} & & \\ \frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & 0 & 0 & \frac{4EI_{yij}}{L_{ij}} & \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \frac{GJ_{yij}}{L_{ij}} \\ -\frac{12EI_{yij}}{L_{ij}^3} & 0 & 0 & -\frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & \frac{12EI_{xij}}{L_{ij}^3} \\ 0 & -\frac{12EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & \frac{6EI_{yij}}{L_{ij}^3} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -\frac{ES_{yij}}{L_{ij}} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & -\frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & \frac{2EI_{yij}}{L_{ij}} & 0 & 0 \\ \frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} & 0 & 0 & \frac{2EI_{yij}}{L_{ij}} & 0 & -\frac{6EI_{xij}}{L_{ij}^3} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -\frac{GJ_{yij}}{L_{ij}} & 0 \end{bmatrix} \text{SYM.}$$
(11)

また式(5)と(7)から $\{\alpha\}$ を消去して、式(4)に代入すれば、杭要素 ij に対する土の剛性マトリックス $[K_{sij}]$ は式(12)のように求められる。

$$[K_{sij}] = [[B]]^* \int_{ij} [A]^* [\bar{E}_s] [A] dz [B]$$

$$= \begin{bmatrix} \frac{13E_{sx}L_{ij}}{35} & & & & & \\ 0 & \frac{13E_{sy}L_{ij}}{35} & & & & \\ 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}}{3} & & & \\ 0 & -\frac{11E_{sy}L_{ij}}{210} & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}^3}{105} & & \\ \frac{11E_{sy}L_{ij}}{210} & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}^3}{105} & \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sx}L_{ij}}{3} \\ \frac{9E_{sy}L_{ij}}{70} & 0 & 0 & 0 & \frac{13E_{sy}L_{ij}^3}{420} & 0 & \frac{13E_{sy}L_{ij}}{35} \\ 0 & \frac{9E_{sy}L_{ij}}{70} & 0 & -\frac{13E_{sy}L_{ij}^3}{420} & 0 & 0 & 0 & \frac{13E_{sy}L_{ij}}{35} \\ 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}}{6} & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}}{3} \\ 0 & \frac{13E_{sy}L_{ij}^3}{420} & 0 & -\frac{E_{sz}L_{ij}^3}{140} & 0 & 0 & 0 & \frac{11E_{sy}L_{ij}^3}{210} & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}^3}{105} \\ -\frac{13E_{sy}L_{ij}^3}{420} & 0 & 0 & 0 & -\frac{E_{sz}L_{ij}^3}{140} & 0 & -\frac{11E_{sy}L_{ij}^3}{210} & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}^3}{105} \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}}{6} & 0 & 0 & 0 & 0 & \frac{E_{sz}L_{ij}}{3} \end{bmatrix}$$
(12)

群杭全体に対する基準座標系を $X Y Z$ 軸にとり、夫々 i 号杭の局所座標系 $x y z$ 方向に、図-2に示したような関係があるときには、 Z 方向座標系による節点力 $F_Z - X$ および節点変位 $U_Z - U_X$ の座標変

換マトリックス $[T]$ は式(13)のようになる。

$$\{\chi_o\} = [T]^* \{\chi_o\} \quad (13-1) \quad (\text{注: } * \text{ は転置行列を示す。})$$

$$\{u_o\} = [T] \{u_o\} \quad (13-2)$$

$$[T] = \begin{bmatrix} \cos\alpha \cos\beta & \sin\alpha \cos\beta & -\sin\beta & -(\beta \sin\beta + \alpha \sin\alpha \cos\beta) & \alpha \sin\beta + \cos\alpha \cos\beta & \cos\beta (\alpha \sin\alpha - \cos\alpha) \\ -\sin\alpha & \cos\alpha & 0 & -\cos\beta & -\alpha \sin\alpha & \alpha \cos\alpha + \beta \sin\alpha \\ \cos\alpha \sin\beta & \sin\alpha \sin\beta & \cos\beta & \beta \cos\beta - \alpha \sin\alpha \sin\beta & -\alpha \cos\beta + \cos\alpha \sin\beta & \sin\beta (\alpha \sin\alpha - \cos\alpha) \\ 0 & 0 & 0 & \cos\alpha \cos\beta & \sin\alpha \cos\beta & -\sin\beta \\ 0 & 0 & 0 & -\sin\alpha & \cos\alpha & 0 \\ 0 & 0 & 0 & \cos\alpha \sin\beta & \sin\alpha \sin\beta & \cos\beta \end{bmatrix}$$

以上の式を用いて群杭の静的解析を行う。杭要素とその周辺の土の剛性マトリックスを式(11),(12)により導き、それらを重ね合せて着目した杭の

剛性方程式(14)をつくる。

$$\begin{bmatrix} \chi_o \\ \chi_i \\ \chi_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} K_{oo} & K_{oi} & K_{on} \\ K_{io} & K_{ii} & K_{in} \\ K_{no} & K_{ni} & K_{nn} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_o \\ u_i \\ u_n \end{bmatrix} \quad (14)$$

ここに $\chi_o, \chi_i, \chi_n; u_o, u_i, u_n$ はベクトルである。
 $\chi_o(x_o, y_o, z_o, m_{xo}, m_{yo}, m_{zo})$ は変位 $u_o(u_o, v_o, w_o, \theta_o, \varphi_o)$
 $\psi_o)$ を維持するに必要な力である。節点 $1, 2, \dots, n-1$
 には外力が作用しないから $\chi_i(x_i, y_i, z_i, m_{xi}, m_{yi}, m_{zi}, m_{xi-1}) = 0$ であり、 $u_i(u_i, v_i, w_i, \theta_i, \varphi_i, \psi_i)$
 未知節点変位である。また $\chi_n(x_n, y_n, z_n, m_{zn})$ は
 杭の下部固定端における未知反力であり、 $u_n(u_n, v_n, w_n, \theta_n, \varphi_n, \psi_n) = 0$ であるとする。したがって、

$$\{\chi_o\} = [K_{oo}]\{u_o\} + [K_{oi}]\{u_i\} \quad (15-1)$$

$$\{0\} = [K_{io}]\{u_o\} + [K_{ii}]\{u_i\} \quad (15-2)$$

$$\{\chi_n\} = [K_{no}]\{u_o\} + [K_{ni}]\{u_i\} \quad (15-3)$$

式(15-1),(15-2)を消去すれば

$$\{\chi_o\} = [K_{oo} - K_{oi} K_{ii}^{-1} K_{io}]\{u_o\} \quad (16)$$

式(13-1),(13-2)を(16)に代入すれば、次々の杭の

基準座標系による剛性方程式(17)を得る。

$$\{\chi_o\} = [T]^* [K_{oo} - K_{oi} K_{ii}^{-1} K_{io}] [T] \{u_o\} \quad (17)$$

群杭を構成している全ての杭について式(17)をたて、これらを重ね合せて群杭全体の剛性方程式を得る。この剛性方程式は6元1次の連立方程式である。容易に解ける。その解を順次、式(16),(15)に代入すれば杭の各部の変位が求められ、応力も求めることができる。

参考文献

H.C.マーテン著 吉藏雅夫監訳 培風館発行 マトリックス法による構造力学の解法

L.C. Reese, M.W.O'Neill and R.E.Smith, "Generalized Analysis of Pile Foundations," Journal of the Soil Mechanics and Foundations Division, ASCE, Vol. 96, No. SM1, Proc. Paper 7032, January, 1970, pp. 235~250.

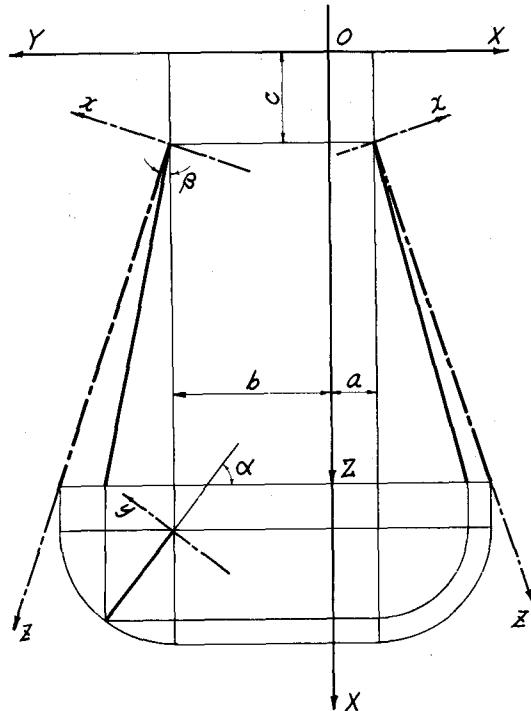


図-2 基準座標系と局所座標系の関係